

昭和 63 年度漁協青壮年部巡回移動相談の実施

1. 目 的

漁協青壮年部の役割は、漁村社会を発展させるためにどんな種類の漁業が必要か、また、養殖にはどのような新しい技術があるか、そして、その導入方法はどのような方法で行えばよいか等細部に亘る計画をもって地域の漁業技術の向上をはかり、これにともなって、漁業主産物の増収、漁家所得の向上による生活の安定を図って行くことが必要である。

このように、地域の問題や漁業技術等積極的に解決していくためには、青壮年部を中心とした各漁業種類別の部会や班を結成し研究活動を活発化して、地域漁業の先達となって、安定した、漁業経営を図ることである。

昭和63年度は下記内容について実施した。(専技室)

2. 移動相談内容

- 1) 部会や班毎の課題設定
- 2) 組織の再編を必要としている青壮年部の指導

3. 実施日程

青 年 部	東 地 区	青 年 部	西 地 区
国 頭 漁 協	6 月 28 日	伊 平 屋 漁 協	7 月 6 日
石 川 漁 協	10 月 3 日	伊 江 漁 協	9 月 9 日
勝 連 漁 協	(流 会) 1 月 24 日	恩 納 漁 協	7 月 11 日
沖 縄 市 漁 協	8 月 12 日	糸 満 漁 協	開催されず
知 念 漁 協	8 月 4 日	具 志 川 市 漁 業 組 合	10 月 18 日
港 川 漁 協	10 月 12 日		
久 米 島 漁 協	7 月 16 日		

※ 漁青連に加入している漁協青壮年部について実施した。

漁協青壮年部移動相談経過

青壮年部	昭和62年度		昭和63年度	
	部会	班の設置状況	設置後の実施状況	
国頭漁協	(1) 釣部会 (2) 潜水部会 (3) パヤオ部会		各部会毎のメンバー構成は終えているようである。実施の段階で3部会の同時スタートは困難であり、とりあえず、釣部会をスタートさせ、その後には潜水、パヤオ部会について検討する。	
恩納漁協	(1) 貝類増養殖研究班 (2) 海藻類研究班 (3) 遊漁班		一時期、貝類研究班と海藻研究班がスタートしていたが、実施途中で全体的な組織のみなおしの必要性が生じたためしばらく中断した状況にあった。 その後、組織のめなおしを行った。	
石川漁協	現青年部では、部の存続がややぶまれるので、解散して、あらたに青壮年部として、組織を再編したい意向である。		組織の再編に向けての取り組みがなされてない。部員の協力も得られないとのことで、移動相談も開催できない状況である。	
貝志川市漁業組合	(1) 海藻類部会 (グループ)		海藻部会を中心に、クビレツタ養殖に取り組んでいる。その成果を、昭和63年度第13回漁村青壮年婦人活動実績発表大会で海藻部会が発表した。	
沖縄市漁協	結成当時20数名の部員が現在では3～4人と活動も積極的でなく、組織のみなおしの声が強かった。		青年部から青壮年部への組織の再編を図るための準備委員会を發足し、アンケート調査による組合員の考え方等組織のみなおしへ向けての準備が進められている。	
勝連漁協	結成時の部員がほとんど退部したため、中断した状況になっている。		津堅支部を中心に7月9日に勝連漁協青壮年部として、再結成された。現在、部会班作りの動きはないが1～2年は他地区の青壮年部との交流を深めながら、具体的な活動について検討する。	
知念漁協	同青年部は、久高島の青年部員が中心になっているため、本島側との調整が十分になされてなく、部会、班結成までにはいたっていない。62年度は事務局案として、(1)パヤオ部会、		同青年部は、部組織とは別に、久高島漁業振興青年会を中心に、漁業技術に関する交流や会員間の情報交換を定期的に行っている。そういった活動はUターン青年にとって最大の情報技	

青 壮 年 部	昭 和 62 年 度		昭 和 63 年 度	
	部 会、 班 の 設 置 状 況		設 置 後 の 実 施 状 況	
	(2)モズク養殖部会が可能であろうとのことである。		術の供給源となっている。今後、同振興会と青年部との位置づけをどうするか検討を要する。昭和63年度、同振興会長の西銘氏が県代表で全国漁村青壮年婦人活動実績発表大会で発表し長官賞に輝いた。	
久米島漁協	(1) マ グ ロ 部 会 (2) 観 光 漁 業 部 会 (3) モ ズ ク 養 殖 部 会		各部会毎のメンバー構成は終えているようであるが、それぞれの班についての課題設定までにはいたっていない。 同部は特に、観光漁業部会を組織化し、具体的な受け入れ体制を確立することが先決であり、事務局を中心に取り組み初めている。	
港 川 漁 協	漁船漁業が主体でほとんど同一漁業を営んでいる。したがって、イノーを利用した。増養殖漁業との組合せができない地区である。そういったことで、同青年部は、部会や班を組織する必要はなく、従来通りの活動を実施したいとのことである。		全員参加の活動を行っているようであるが、実際には、具体的な活動の方法等明らかでなく、また、プールになっているため、役割分担がなかなか困難のように思われる。昭和63年度には、活魚についての特別研修も行っており、その成果をいかすためにも部会なり班なり必要ではないか。プールでは難かしいと思う。	
伊 平 屋 漁 協	同青年部は、港川とは逆に、モズク養殖主体の漁業形態である。組合の下部組織として「モズク養殖生産部会」が機能しているためその他の部会、班は必要としない部分がある。部活動そのものが沈みがちであり、組織の活性化が急がれる。		役員改正等行い、新体制のもとで活動の推進を図る。すでに、アイゴの養殖に取り組みむなど一部進めているが、具体的な体制作りにはいっていない。 新体制での部会、班設置を検討する必要がある。	
伊 江 漁 協	一部、フクトコブシの放流や養殖等、これまで進めてきているが、組織としての対応が十分でなく、中途半ばで終わっている。部会、班活動を行なう前提として、青壮年部の組織力がよいことには、部会、班を作っても長続きせず育たない。		現組織を継続するか、それとも、みなおしを図るか事務局と話し合いを持つ必要がある。 青壮年部活動は、組織の強化が前提である。	

青 壮 年 部	昭 和 62 年 度 部 会 、 班 の 設 置 状 況	昭 和 63 年 度 設 置 後 の 実 施 状 況
糸 満 漁 協	青年部員の漁業形態が独立した経営体でなく、乗組員として、漁業に従事している部員が多く、青年部活動を行なう上で大きな要因になっている。そういったこともあってか、全体的に独自性がなく周囲に遠慮しがちな所がある。したがって、組織そのものが機能してなく、活動も活発ではない。	63年度は、移動相談は開催されてない。 ○船主を取り込んだ組織作りを考えたかどうか。 ○青壮年部の組織に船主会を取り込んで相談役として参加させることにより、青年部活動を多少なりとも理解させることができる。部員も動きやすくなるのではないかな。